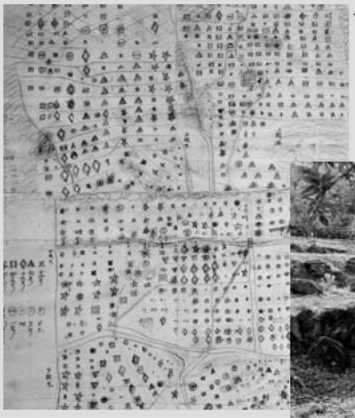
広告

いしかり産

▼明治36年、開拓使から苗木の配布を受けた浜益の農家の中には「リンゴを宮中に献納したい」と願い出る人も(『浜益村史』より)。



◀2代目当主が残した、同園の果樹栽培の記録。

▼ヤン衆の築いた石垣は今もそのままに。

今もおいしい実がなる 明治に植えたリンゴの木

浜益の幌地区にあるきむら果樹園には、134年前に植えられたリンゴの木があります。明治10(1877)年に開拓使が無償で配布した苗木を、当時、ニシン場を営んでいた初代当主が植えたものです。リンゴの木がある段々畑を訪れると、ニシン場で働いていたヤン衆たちが造ったという石垣がそのまま残されていて、幌地区の果樹栽培の歴史を肌で感じることができます。

『浜益村史』によると、開拓使が浜益に配ったリンゴの苗木は416本。うち半数以上が幌地区に希望配分されたと記されています。幌は水はけも良く、昔から果樹栽培に適した場所だったのでしょう。加えて「このあたりは木が生い茂って、枯れた葉が腐葉土となったため、今でもおいしいリンゴができるんですよ」とは同園4代目当主の木村武彦さん。

帰り際、木村さんが1枚の紙を見せてくれました(写真参照)。それは、同園のどこに何が植えられているのかを詳細に記したもので、2代目当主が残したもの。木村さんはしみじみ眺めながら「実はこれがあったおかげで、明治に植えた木がどの木か分かったんですよ」と教えてくれました。

確認できたのは全部で18本。そのうち6本には明治の品種──緋の衣・紅絞・紅玉──がなります。木村さんは今、残りの木についても明治のリンゴをよみがえらせようと取り組んでいて、「うまくいけば、(上記3種以外の)明治のリンゴが実る可能性もあります!」とのこと。

なお、同園で収穫される"明治のリンゴ"は、実際に購入して、食べることができます。風雪も戦争も乗り越え、守られてきた味と思うと感慨もひとしおです。ぜひご賞味ください。

●"明治のリンゴ"が購入できる場所
・きむら果樹園　所浜益区幌64-18 ☎79-2835

◎石狩随想 57

陣屋跡にて

歴史の舞台は露草に覆われ、行く手を阻むほど深く、往時の面影は浜益村開村100年の際、再建の大手門に偲ぶだけとなっている。国の史跡荘内(庄内)藩ハママシケ陣屋跡の今の姿である。元治元(1864)年、本陣務めとなった父とともに移り住み、その後、開拓使の大判官となった松本十郎を顕彰する山形県鶴岡市の皆さんや、十郎を曽祖父とする縁者の方々などがこの地に集い、思いを馳せた　◆今はその姿さえ全く留めることなく、石狩川改修の堤防下に埋もれた石狩役所跡。私の記憶に残るのは屋敷を囲んでいた土塁でのスキーと、萩の道しかなく、思いを致す人さえわずか。幕末から明治草創期の史跡として調査、保存されなかったことは残念な思いがする　◆現在、市には市指定6件、道指定2件、国指定2件の文化財が遺されている。これらを次代に受け継いでこそ、私たちが生きた何よりの証しであり、歴史の中に居ることに他ならない。半世紀にも満たないわずかな間に本町、八幡の屋並みは移ろい、記録の薄さに気付いた時には取り返しようもない◆筆と紙のみによって千年以上の歴史を引き継いだ先人たち。一方、今はあまりにも多くの手段を持ちすぎ、その結果、誰かが、どこかで私たちの「街」を、「暮らし」を留めていると思い、流してしまいかねない。浜益の陣屋跡にて自戒を込め。　(市長)

※市指定＝石狩弁天社、チョウザメの剥製、石狩八幡遺跡ワッカオイ地点第20号墓出土の土器、旧長野商店、金子家文書、はまます郷土資料館　▽道指定＝石狩弁天社の鮫様、金龍寺の鮫様　▽国指定＝荘内藩ハママシケ陣屋跡、ピリカノカ黄金山